

## 平井一正先生を偲んで

神戸大学山岳会元会長 井上達男

2021年2月15日、先生は帰らぬ人となられた。享年89歳、まだまだ元気に我々後進の指導を願えるものと思っていたが、残念な別れとなった。昨年暮れから入院手術、その後意識をなくされたままお釈迦様が亡くなった同じ日に天に召された。



2011年8月26日 太郎平

先生の登山歴は多くの方がご存じと思いますが、少し振り返ってみます。1954年、京都大学山岳部に入部されて以来、国内では積雪期の剣尾根に挑戦されるなどご活躍、1958年には京都大学のチョゴリザ遠征に参加、藤平氏とともに頂上に立たれた。また1962年にはサルトロカンリ遠征に参加された。その後神戸大学に赴任され、1965年山岳部副部長に就任。

1966年3月、神戸大学山岳部は春山合宿で西鎌尾根から槍ヶ岳を目指して行動中、千丈沢乗越手前で部員が水鉛谷へ滑落する事故があった。先生は捜索隊に参加され、遺体発見と収容に活躍された。それ以来今日まで神戸大学山岳部と山岳会に深く係わられることとなった。1986年には山岳部部長に、1997年には山岳会会長に就任され、2006年に勇退されるまで労を惜しむことなく後進の指導にあたられた。

1976年、カラコルムのシェルピカンリ7380m遠征では初めての海外遠征隊長として見事初登頂に成功された。また、1986年にはチベット学術登山隊を組織、総隊長としてクーラカンリ7554m初登頂成功とラサから成都への川蔵公路の外国人初踏破を含む多くのテーマの学術調査を指揮された。この隊に参加した中国地質大学(武漢)の学生であった李至新氏は現在中国登山協会のトップとして活躍されている。加えて1988年には先生指導の下、四川省のチェルー山6168mに中国地質大学(武漢)と学生主体の合同登山隊を派遣、初登頂に成功している。登山での国際交流推進は「共に苦勞して築いた友好は平和への大事な礎である」と常に我々に問いかけられた先生の信念であった。

先生が参加された最後の遠征は2003年カンリガルポ山群、ルオニイ峰6882mだ。全長280kmの山群に未踏の6000m峰が47座数えられたが、その最高峰への挑戦であった。残念ながら悪天候と絶望的な山容のために敗退した。遠征当時ご令室が肺癌を患われていたが、そのことを伏せての総隊長としての参加であった。ご令室の葬儀の時に初めてその事実を知らされ、驚愕した。愛妻家であられたので当時の苦悩は計り知れないものであったろうと心が痛んだ。その後、神戸大学隊は2009年に山群第二の高峰、ロプチン峰6805mに初登頂した。

チョゴリザを皮切りに5回の海外遠征と4回の初登頂に成功されたが、誰一人犠牲者を出さずの登山人生を送られた。2010年、瑞宝中綬章を授与されたとき、「山で貰ったんと違うで」と自ら弁明されていたが、誰もがやっぱり山に違いないと思ったものだ。専門のシステム工学での功績と大学間の国際交流での実績が評価されたのではあるが。

先生との出会いは1966年、私の神戸大学入学時まで遡る。合格発表とともに即山岳部に入部しようとした矢先、前述の遭難事故があった。入部を躊躇しているとき、「チョゴリザに初登頂したすごい先生がいるから会いに行け」と先輩に言われて研究室を訪ねた。小柄で硬い表情の学者という感じだった。

「山岳部に入部した新入生です」と挨拶すると、にこやかな表情に変わって親しく歓談させていただいた。それで山を続ける決心がついた。翌年春に但馬の鉢伏山から瀬川山へのスキー縦走に同行いただいた。華麗なシュテムクリスチャニアで新雪を颯爽と滑降する姿に感心した。これが初めての山行だった。

その後先生はドイツに留学されてしばらく疎遠になっていたが、帰国されたときには、シェルピカンリの遠征計画が進められていた。1974年に第一次隊が派遣され、私も参加した。帰国後に先生が本隊の隊長を引き受けられ、準備が進められた。豊富な経験から、何事も適切に進められるので安心して担当の仕事に邁進することができた。

1976年6月16日、シヨーク川岸のカパルーからキャラバンが始まった。150人近くのポーターや隊員がザークで川を渡るのは半日仕事であった。私は先発隊として谷奥にマッシュャブルムの聳えるフーシェ谷の渡渉を偵察するために先を急いだ。川幅300mに数本の流れができていて膝上までの冷たい濁流が音を立てて流下していた。難なく涉って対岸から引き返しキャラバンの到着を待った。ポーターの先頭集団十数名が元気にやってきたので先導して渡渉し、対岸のキャンプ地ハルディに到着した。遅々として進まないポーターの集団が渡渉地点についたのは午後4時だった。その後、事件が起きた。夕方の増水で流れに足を取られて数名のポーターが流された。何とか助けたものの介抱に時間がかかりその日はキャラバンを止めた。結局ポーターたちは渡渉を拒んでフーシェ谷を溯って橋を渡り二日間かけてハルディにつく羽目となった。隊が集合した夕食後に反省会がもたれたが、先生がいの一番に「ポーターたちの協力なくして遠征は成り立たない。彼らも仲間である。それをよく考えて行動せよ」と叱責された。私のミスリードが原因であったが、チームワークの欠如は明白であった。その指摘もあったが、やはりポーターも隊の一員であるとの意識が大切であることを思い知らされた。その後隊は引き締まり、登頂に成功した。先生の隊員たちの安全に対する気配り、危険回避の指摘などを含めて、リーダーとしての能力は素晴らしいものだった。

2011年8月、もうすぐ80歳の先生から「黒部の赤牛に登りたい。一緒に行ってくれるか」と電話があった。2010年9月には先生が登り残していた塩見岳に同行したが、今回は最後の大きな山行にしたいということだった。太郎平から入山し、雲ノ平を経て水晶岳を越えて赤牛岳に至り、黒部湖に下山する3泊4日の旅だった。私一人では何かの時に対応ができないと考えて頼りになる仲間二人に参加してもらった。先生はゆっくりとした歩きだったが、毎日元気に山を楽しまれた。黒部ヒュッテから黒部第四ダムまで、アップダウンが延々と続く道はきつかったことと思われる。

私事だが、「お前の嫁さんは俺が見つかる」と引き合わせてくれ、媒酌もしていただいた。出会いの大切さを教えていただいた。先生が媒酌の山屋カップルはみな仲が良い。山岳会長を勇退される時、「後を引き受けよ。拒否権なしだ。」「やってきた未知への挑戦を継承するのは君の責務だ。」と説得された。2009年のロプチン峰、2015年のタリ峰遠征を実現できたが、先生のご指導あってのことだ。

出会いから54年、わが人生を決定的に道付けしていただいたことに深く感謝している。